



## 日本での十日間

フェルナンド・カルロス・シャマス (サンパウロ大学日本文化専攻院生)

### はじめに

私は神奈川大学21世紀COEプログラムの招聘により海外若手研究員として約2週間日本に滞在しました。この期間は日本文化研究を専門とするブラジル人の私にとって非常に有意義な日々でした。

### サンパウロ大学日本文化研究所

私はサンパウロ大学哲学・文学・人間科学部日本語・日本文学・日本文化大学院コースで日本仏像について修士論文を書いています。私が研究を行っている日本文化研究所は1968年に鈴木悌一先生によって創立され、1976年から日本文化館の中に設置されています。日本語や生け花・茶道など日本文化普及のためのコース、セミナーなどを実施し、日本や他の外国から先生を招聘していません。定期的に、日本語、日本文学、日本文化についての講演を主催する他、個人またはグループの研究プロジェクトをサポートし、研究所員によって書かれた*Estudos Japoneses* という論文集も発行しています。

研究所の中にあるTeiiti Suzuki図書室は日本語、日本文学、日本文化に関心を持っている人々・他大学の研究生・教師・学生のために開かれています。ここには仏像についての本が多く、日本研究の文献に関しては南米でも一番といわれていますが、やはり限度があります。

### 日本滞在

今回の滞在中、鎌倉（明月院、建長寺、浄智寺、円覚寺、鶴岡八幡宮、大仏）京都（観智院、三十三間堂、平等院）と奈良（東大寺、広隆寺、興福寺）で、日本のお寺や仏像にじかに接することができ、いくつかの仏像を面と向かって見ることができたのは貴重な経験でした。東京国立博物館では唐招提寺と法隆寺の建築、絵画や仏像についての展示を見ました。日本では現代においてさえもこのテーマに未だに関心があるのだと思いました。この唐招提寺の展示が、仏像の原料、技術、種類などや研究の方法論を明らかにしてくれました。お寺や博物館の仏像を前にした日本人を見て、人々が心の奥底から感動している様子を感じとりました。この数年間仏像を研究していた私が、日本を訪れ、今までただ夢でしか見たことのなかった風景の中に立っているような錯覚をおこしました。おかげで今はこれらの仏像をもっと真実性や

感受性をもって言い表すことができます。ブラジル人として古い仏像を、日本人とは違った感受性で見ることができるようになったと思っています。

修士論文では仏像が日本に伝来した頃から平安時代末までの歴史をテーマとし、数えきれないほどの仏陀の肖像学や象徴について扱っています。日本の仏教はブラジルでも研究されていますが、日本での仏教布教における仏像の歴史的な重要性は研究されていません。滞在中買った本のうちの一冊は曼荼羅についての本ですが、幾何学的なデザインによるその複雑な美しさは非常に興味深いものでした。お寺や博物館の仏像の配置を理解するのに欠かせない曼荼羅の本質的な特徴はブラジル人にはまだ知られていないため、これからも学会等に参加して、研究結果を発表していきたいと思います。

### おわりに

ブラジルは日本から本当に遠いですが日系人は多く、料理、教育や宗教などそれぞれ差はありますが祖先が持ち込んだ日本の文化を保っています。日本人でも日系人でもない私にとって、2週間の滞在中、今まで本、テレビ、映画、美術展や日系人の友達を通して間接的に知っていた文化を実際に見ることができました。ここでの経験と、刺激を受けたことで、私はブラジルで仏像の複雑さを説き、日本文化を広めることが少し出来るようになった気がします。

今回の滞在により、わたしの研究が進歩したのは言うまでもありません。この機会を与えて下さった神奈川大学COEプログラム、そして関係者の皆様に心から感謝いたします。

(フェルナンド・カルロス・シャマス氏は2005年1月28日から2月11日まで訪問研究員として来日。)

サンパウロ大学日本文化研究所前にて。

